

志木のまち お宝発見講座 はじまる

（案内人養成講座）

志木のまち案内人の会・
志木市いろは遊学館 共催

とき…平成24年7月8日

テーマは

志木の寺々―宝幢寺と東明寺



東明寺の庚申供養地蔵

寛文七年（一六六七）二月に建立され、
地蔵像の像塔で、光背に
庚申供養也 武島新倉郡登保村

と刻まれています。

引又村（現在の木町地区付近）にこの「登保」の字が使われたのは、当時の新河岸川と柳瀬川の合流地点付近の地形が、登保のはいつくばった形に似ていたところからきているといわれています。

この庚申供養地蔵は、「登保」の字が使われている市内唯一の石造遺物であり、大変史料価値の高いものです。

平成四年三月三十日

志木市教育委員会











寶幢寺

正式には地王山地蔵院寶幢寺と称し、江戸期には醍醐三寶院を本山としていましたが、明治二十七年から京都智積院を本山とする新義真言宗智山派となりました。

その創建年代については、建武元年（一二三四）四月に祐円上人が開山したという説や、現在の寺の門外の西方にあった墓場の中の地蔵堂を基に天正年中（一五七三―九二）に新寺として開山したという説、もともと現在の教島神社付近にあったものが、柏の城が落城した後、中世末期から近世初頭頃、柏の城の城主大石信濃守の子息大石四郎の屋敷跡といわれる現在の地へ移転してきたという説などがあり、未だ定説はありません。しかし、いずれの説をとるにせよ柏の城落城後に現在の地に建立または移転されたのではないかと推測されています。

『新編武蔵国風土記稿』によれば、三代將軍家光が鷹狩りの際休息したのが機縁となって、慶安元年（一六四八）に御朱印地十石を賜り、また、境内が狭いと言って門前に一町歩加増してくれたとの記述がみえます。更に「此辺ニテノ大寺ニテ、末寺モ三ヶ寺アリ」とあり、当時よりこの辺でも大きな寺院であったということがわかります。

なお、この寺には「お地藏さんとカッパ」という伝説や「ほったの黒いお地藏さん」という伝説などが伝わっています。

平成七年十月二十日

志木市教育委員会

文化財まっぷ 歴史散歩案内編

Bコース 館村をあるく～古代・中世のロマンを求めて～

寶幢寺

次は、東明寺の庚申供養地蔵です。

ほうどうじ
宝幢寺

こほく
古木あんない

番号	木のなまえ	巨木番付	太さ	高さ
①	イチヨウ	東横綱	5.67m	29.0m
②	ケヤキ	東大間	4.82m	37.5m
③	ケヤキ	東間脇	3.88m	27.5m
④	ケヤキ	東小結	3.73m	21.1m
⑤	ケヤキ	東前頭5枚目	3.41m	24.5m
⑥	タラヨウ	東前頭7枚目	3.30m	15.0m
⑦	ヒマラヤスギ	東前頭8枚目	3.28m	30.0m
⑧	ケヤキ	東前頭12枚目	3.17m	27.0m
⑨	ムクノキ	東前頭14枚目	3.16m	20.5m
⑩	ムクロジ	東前頭19枚目	2.92m	20.0m
⑪	コウヤマキ	古木	2.91m	20.0m
⑫	ボダイジュ	古木	1.67m	14.5m
⑬	チョウショウインハタザクラ	市天然記念物の接ぎ木(平成10年3月移植)		

※巨木番付＝志木地区を「東」、宗岡地区を「西」としています



調査：志木市環境教育推進員の集い 設置：志木市コミュニティ協議会











東明寺の庚申供養地蔵

寛文七年（一六六七）二月に造立された地蔵像の像塔で、光背に

庚申供養也 武島新倉郡登保村と刻まれています。

引又村（現在の町地区付近）にこの「登保」の字が使われたのは、当時の新河岸川と柳瀬川の合流地点付近の地形が、登蛙のはいつくばった形に似ていたところからきているといわれています。

この庚申供養地蔵は、「登保」の字が使われている市内唯一の石造遺物であり、大変史料価値の高いものです。

平成四年三月三十日

志木市教育委員会

